

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530204

研究課題名(和文) 共生と脱覇権の国際秩序像 - 英国学派国際関係論による包括的検討

研究課題名(英文) Symbiotic and Supra-hegemonic International Order : Comprehensive Study of the English School of International Relations

研究代表者

佐藤 誠 (Sato, Makoto)

立命館大学・国際関係学部・教授

研究者番号：70205962

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：計画はほぼすべて実施し新たな知見を得た。また単行本・論文・シンポジウムを通じて成果還元を努めた。成果発表では、国内外での報告を踏まえて『英国学派の国際関係論』を刊行した。また毎年国際シンポジウムでは英国・アベリストウィズ大学のアンドリュー・リンクレイター教授、同ヒデミ・スガナミ教授、台湾国立大学のシー・チー・ユ教授などが理論や東アジア国際社会の現状をめぐって日本側報告者と論点を深めた。最新の研究書Guide to the English School in International Studiesは、日本を代表するRitsumeikan Projectとして本プロジェクトを紹介した。

研究成果の概要(英文)：Most of the initially planned research programs were realised, leading to some important findings. These findings were socially publicized through the publication of our new book, International Relations Theory of the English School, as well as through the contributions to academic journals and conference presentations by project members. International symposium was held each year, inviting internationally renowned IR scholars of (or on) the School such as Andrew Linklater and Hidemi Suganami of Aberystwyth University, who exchanged views with Japanese participants. Recently published work on the School, Guide to the English School in International Studies, named our group "Ritsumeikan Project" as the leading Japanese group of the study on the English School.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：国際理論 英国学派 国際平和 国際正義 共生 文明 国際社会 国際秩序

1. 研究開始当初の背景

(1) 21世紀の世界の現実、国際関係論に何を突き付けているか。明らかなのは、主流の米国型国際関係論のモデル、米国主導の「覇権的秩序」論、(新)自由主義主導の「グローバル市場社会」論が、ともに現実に対応しえなくなっていることである。アフガニスタンやイラクにおける対テロ戦争が軍事的に行き詰っていたばかりでなく、政治・経済・社会的再建(グローバル市場への統合)にも成功していなかったからである。

(2) 世界の現実、主権国家の崩壊という、国際関係の前提そのものを覆す事態を突き付けている。それは当該地域の人民にとって深刻な問題であるばかりでなく、ソマリアの海賊による商船襲撃の例が示すように、グローバルな脅威でもある。「保護する責任」論は、人権保護とともにこうした脅威に迫られての対応とみることができよう。

(3) 国際関係論のパラダイムの根本に「秩序」(主権による平和)と「正義」(国境を越える人権)を据えて、国際社会の理解を試みてきたのが英国学派であった。近年は、秩序を重視する「多元主義」と正義を重視する「連帯主義」から、両者の緊張関係を書き出している。

2. 研究の目的

(1) 英国学派国際関係論(以下、英国学派)が提起する秩序と正義、主権と人権の相克という課題を受け止めつつ、多主体の共生という第三の軸を導入することで、覇権秩序と市場自由主義に立つ米国型国際関係論に替わるオルタナティブな国際関係論構築に寄与する。

(2) イシューおよび地域の両面から現在の国際政治を象徴し、また英国学派の理論的提起に対応する事例分析に取り組む。

(3) 以上の目的を達成するため、また国際関係論の長期的な発展のため、英国のみならず英国学派への関心を急速に高めているアジア地域など海外の研究者とのネットワーク構築に努力する。

3. 研究の方法

(1) 英国学派に属するか学派について研究する第一線の研究者を海外から招聘して国際セミナー・シンポジウムを定期的開催することで、世界最先端の理論動向を把握するとともに、対抗議論を通じて日本の研究者の独自の視点と問題関心を海外に発信する。

(2) 理論研究と照応させつつ、地域(東アジア、アフリカ、東欧など)およびイシュー(人

道的介入、民主化など)ごとの実証分析を行うことで、理論の検証を行う。

(3) 学派内外の国際関係論の古典と見なされて来た著作に着いて継続的に学習と研究をする。

(4) グループ内部の研究会をベースに、論文、単行本、学会、各種セミナーなどを通じて国内外で積極的に成果の(中間)発表に努める。とりわけ国際学会での発表を重視する。以上、いずれの取り組みにおいても若手の参加に努め、将来的な研究の継続を図る。

4. 研究成果

(1) 研究書の刊行: 最大の目標であった研究書の刊行が2013年10月に実現した(佐藤誠・大中真・池田丈佑編『英国学派の国際関係論』日本経済評論社刊)。グループとして、これまでの2冊の翻訳書の刊行に続く成果であり、英国学派については日本初の体系的な研究書としてメンバーほぼ全員が執筆に参加した。なお、同書のほか、主な成果として単行本6刷、論文14本、学会発表13回などが挙げられる。

(2) 国際シンポジウム(セミナー)の開催: 3年間を通じて毎年、海外から英国学派内外の研究者を招きシンポジウムを開催した。世界最先端の研究動向を把握し、かつメンバーの成果や問題関心を交換することが出来た。また、聴衆の多くを占めた若手研究者や院生の関心を深めた。被招聘者には英国アベリストウィズ大学のアンドリュー・リンクレイター教授、同ヒデミ・スガナミ教授、オーストラリア国立大学のイアン・ホール博士など理論を対象とした研究者と、台湾国立大学のシー・チー・ユ教授など地域での学派理論の理解のされ方を中心とする研究者が含まれる。

(3) 研究のグローバル・アウトリーチとネットワーク形成: 英国学派国際関係論については本プロジェクトが日本の主要拠点であるという認識が、世界的に生まれつつある。2014年刊行の研究書 *Guide to the English School in International Studies* は、日本を代表する Ritsumeikan Project として本プロジェクトを紹介した。また米国国際関係学会・英国学派分科会でも、その成果が認知されている。2013年3月の米国国際関係学会では、プロジェクトが主催するパネル報告としての成果公表を実現しており、次年度はこれを踏まえる格好で、ドイツ・フランクフルトで開催される国際会議に成果をつないでゆく予定である(2014年8月6-9日。於フランクフルト・ゲーテ大学。現時点で4名のプロジェクト関係者が参加確定)。

(4) 若手研究者育成: 最先端の研究をフォロ

ーする活動と並んで、年間を通じて若手研究者の育成も兼ねた基礎理論研究会を組織した。また、国際シンポジウムやセミナーの開催に当たっては、大学院生を対象としたセミナーを開催し、教育的側面から研究成果の社会的還元に努めた。とりわけ、若手研究者が、国際学会・国際会議などで研究成果を公表する機会を積極的に提供した。たとえば、先述の米国国際関係学会の続編として2013年11月に台湾・高雄市で開催された「アジア太平洋研究会議」で若手2名が報告した。

(5) 3年間に到達したおよその共通認識には以下のようなものが含まれる。アナーキーではあるが秩序ある社会であるとみる学派の国際社会論は、なお批判的に学ぶべき内容を備えている。文明への着目にも関わらず、学派は終局的にはヨーロッパ中心主義を免れなかった。学派を理解するためには西欧政治思想の文脈理解が不可欠。反発から地域ごとの国際関係論学派を立ち上げるだけでは、ナショナリスティックないし国家主義的な反発に留まる可能性がある。近代の「文明化過程」など、多元性のなかの普遍志向に着目することが重要であろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計14件)

佐藤誠、民主化とガバナンスのジレンマ—ルワンダ愛国戦線政府の評価をめぐって、立命館国際研究、査読無、26巻4号、2014、21-44。

佐藤誠、日本人の平和認識—英国学派の『多元主義』『連帯主義』論争に照らして、立命館国際研究、査読無、25巻3号、2013、231-249。

大中真・角田和広、組織としての『英国委員会(the British Committee)』と英国委員会研究の発展可能性の検討—ブルネッロ・ヴィジエツィの貢献を中心に、立命館国際地域研究、査読無、37号、2013、169-174。

Shani, Giogiandrea, From National to Human Security? Reflections on Post 3.11 Japan, Journal of Social Science, 76(1), 2013, 5-24.

大中真、英国学派(イングリッシュ・スクール)の生成—チャールズ・マニングとその思想、一橋法学、査読有、第10巻第2号、2011、531-551。

Shiro Sato, The IR discipline would discipline Asian Studies', in Shiro Sato, Josuke Ikeda, Ching Chang Chen, and Young Chul Cho (eds.), Re-Examination of

'Non-Western' International Relations Theories (Kyoto Working Papers on Area Studies, No. 118), Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, June 2011, 1-11.

[学会発表](計13件)

Miyazaki, Asami. Japan's Efforts for Mercury Management in the Build-up to the Minamata Convention, International Studies Association, Toronto, Canada, 27 March 2014.

佐藤誠「過去の戦争、未来の戦争、そして現在の戦争—日本人の戦争認識についての一考察」日本平和学会中部・北陸地区研究会、南山大学(愛知県名古屋市)、2013年11月30日。

佐藤史郎「核兵器をめぐる禁忌と逆説」日本平和学会(秋季研究大会、分科会「軍縮と安全保障」)明治学院大学、2013年11月9日。

Hitomi Yamanaka, British IR Debate in Wartime Japan, International Studies Association, Hilton San Francisco Union Square, California, USA, April 6, 2013.

Asami Miyazaki, Emerging Loose System in Regional Institutions: Networked Cooperation on Transboundary Air Pollution in East Asia, International Studies Association, Hilton Union Square, San Francisco, USA, 5 April 2013.

Chen Ching Chang, Taiwan, Sino-Japanese Relation, and the Origins of the Senkaku Islands Dispute, International Studies Association, Hilton Union Square, San Francisco, USA, 4 April 2013.

[図書](計6件)

佐藤誠・大中真・佐藤史郎・陳慶昌(佐藤誠・大中真・池田丈佑編)、英国学派の国際関係論』日本経済評論社、2013、278(26-39, 97-111, 165-185, 227-244)。

龍澤邦彦(松下洸・山根健至編)、共鳴するガヴァナンス空間の現実と課題、2013、晃洋書房、287(39-55)。

Chen Ching Chang, Useful adversaries: how to understand the political economy of cross-strait security, New Thinking about the Taiwan Issue: Theoretical Insights into Its Origins, Dynamics, and Prospects, edited by Jean-Marc F Blanchard and Dennis

V Hickey, London: Routledge, 2012, 256 (48-70).

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

http://www.ritsumei.ac.jp/acd/re/k-rsc/ras/03_research/2012/irtheory.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 誠 (SATO, Makoto)
立命館大学・国際関係学部・教授
研究者番号：70205962

(2) 研究分担者

大中 真 (ONAKA, Makoto)
桜美林大学・人文学系・准教授
研究者番号：70310331

(3) 研究分担者

SHANI Giorgiandrea
国際基督教大学・教養学部・准教授
研究者番号：40569993

(4) 研究分担者

龍澤 邦彦(TATSUZAWA, Kunihiro)
立命館大学・国際関係学部・教授
研究者番号：40255162

(5) 研究分担者

佐藤 史郎(SATO, Shiro)
大阪国際大学・国際コミュニケーション学部・講師
研究者番号：40454532

(6) 研究分担者

宮崎 麻美 (MIYAZAKI, Asami)
熊本学園大学・経済学部・講師
研究者番号：60579332

(7) 研究分担者

陳 慶昌(CHEN, Ching-Chang)
立命館アジア太平洋大学・アジア太平洋学部・准教授
研究者番号：50569788

(8) 研究分担者

山中 仁美(YAMANAKA, Hitomi)
名古屋商科大学・経済学部・准教授
研究者番号：30510028
(平成24年5月15日追加)

(9) 研究分担者

池田 丈佑(IKEDA, Josuke)
大阪大学・国際公共政策研究科・研究員
研究者番号：50516771
(平成23年12月9日辞退)

(10) 安藤 次男(ANDO, Tsugio)

立命館大学・国際関係学部・教授
研究者番号：50066726
(平成24年10月16日辞退)